

文化の継承

その十
しな織



「しな織は、工程そのものが工芸品に値する」 - 山中良子元東北芸術工科大学教授

温海地区の山間、新潟県との県境に位置する関川集落に古くから受け継がれてきた「しな織」。それがいまは、沖繩の芭蕉布、静岡の葛布と並ぶ日本三大古代織に数えられています。これは、この創作に携わられた歴代の先人の方々から現代の方々まで、厳しい苦勞を重ねながら、貴い伝統を誠実に護り、築いてこられたからに他なりません。

そこで今回は、関川しな織協同組合理事長の五十嵐勇喜さん、同組合職員の五十嵐美穂さん、しな織の指導者として活躍の五十嵐喜代さん、しな織研修生の武地葉子さん、そしてしな織の商品化、デザイン化の全国レベルでの指導者であられる須田柳子さんにお集まりいただき、しな織に係る地元総合プロデューサーでもある石田誠さんの司会によって、しな織の歴史、魅力、継承にかける思いなどについて語っていただきました。

しな織の歴史

石田 庄内で唯一の伝統的工芸品である「しな織」について、様々な角度から話し合いたいと思います。

「しな布」は日本の文献の中では、平安時代の前期、『延喜式』の中で、税金の現物納として記録されているというのが最初です。

庄内では、幕末の天保時代、庄内藩士の池田玄斎という人が、庄内の人の暮らしについて書いて

た本の中で、袋とか、畳の縁に使われていたという記録があります。こういう我々の生活の中で使うものは、当たり前すぎて、わざわざ記録しようなんてことがなかったようです。勇喜さん「しな織」は関川地区ではいつころから始まったもんですか。

勇喜 なかなか記録がないんですけども、大山の酒屋さんで明治十年ころに使われた、「しな織」の立派な酒袋が何十枚と見付かっています。昔は関川だけでなく隣村にも「しな織」はあったんだけど、その酒袋の中

五十嵐喜代氏

関川生まれで、幼少のころからしな織を続け、現在も地域の中核的な存在として活躍



須田 柳子氏

科布帽子工房代表
しな織の商品化、デザイン化の
全国レベルでの指導者



五十嵐勇喜氏

関川しな織協同組合理事長、関川しな織保存会会長、羽越しな布振興協議会会長



武地 葉子氏

しな織研修生
福島県三春市出身。今年四月からしな織技術の習得に励む



五十嵐美穂氏

関川しな織協同組合職員
現在、同組合のベテラン職員として織りを中心に活躍



司会 石田 誠氏

しな織創芸店代表
「しな織の地元総合プロデューサー」として全国を奔走中



に関川のものが入っていたのは間違いのないと思います。

昔は家のお母さん、おばあさんたちが冬の間に糸作りをして、春になるとそれを布に織って、そして大体四月から五月にかけて商人が来て、買って行っただけです。買い取ったものは一旦、鶴岡の荒物屋を通して今度は仙台とか広島、北海道などに送ってやっただけです。買った人はそれで袋を作ったり、赤飯とか餅をふかす時のセイロの敷き布など、要するに生活用品として多く使われたようです。

戦前から戦中、戦後にかけてずっと、生産量は相当の量があったわけですが、アメリカやヨーロッパから化学繊維が入ってきて、その時点で落ちてきたんです。安く入るし、量的にも多く出るし、色も鮮やかなものが入ってくるので、「しな織」が一時売れ行きの悪い時代が来ちゃいます。昭和三十年代に入ってからでしょう。

「結」の伝統

石田 そんなんですけど。戦後間もないころまで温海町一帯で「しな織」が盛んだったのが、現

在は関川地区のみ。どういう理由からでしょうか。

勇喜 まず一つは、やっぱり雪です。関川はこの辺の中でも一番雪が多い村ですので、雪が「しな織」を残してくれたと、私はそういう説明をしています。ほら、豪雪っていうのは要するにほかとの断絶に近いような状態ができるわけですので、「しな織」の糸作りをするには、逆に良い環境なわけですね。

それから、もう一つは「結」ということ。これは、村の人たちが仲がよいという条件、お互いに信頼し合っているという条件で成り立つと思うんですが、その風習が昔からずっと伝わってきた。今はちょっと、情勢は変わってますけども、その気持ちだけは連綿として引き継がれていると思います。

石田 その「結」っていうのは、歴史の本には、鎌倉時代、お互いの労働の貸し借りを、要するにお金ではなくて、互助制度で書いてあったかな。

喜代 関川の「しな織」で一番「結」を使ったっていうのは、『しなより』（五頁写真 参照）です。より車一個ずつ持って、五、六人集まって糸よりをする。この共同作業を「結」と言っている。今日はうちでよるから来てく

ださい。って頼みます。

一つの「へそ玉」（五頁写真参照）は四〇〇ですが、それをまず午前中一個はよる。私なんか初めて「結」に歩いたころは、隣の人が一個終わると慌てて、それこそ自分のペースでやっただけのんびりやれるけども、そういうのが大変でした。

また、子供のころは自分の家で今日はしなよりだっというところ、ごちそうがいっぱいあってすごく楽しいわけ。まず、一服の十時やお昼、夜は五時ごろに「ごちそう」作って食べさせて。その用意も大変だけど、子供のころは、「今日はしなよりだから、いっぱいごちそうある」というような感じでやってました。

先輩のおばあさんたちは、すんごくきれいな「つむ玉」（より糸）を巻き取った菱型の糸玉五頁写真 参照）ができるわけ。そういう場に若い嫁さんたちを引っ張り込むわけ。

そのしな織った布のお金は嫁の小遣いになったんです。だ

「しな織」の工程

倒木から機織りまで

(次頁の写真もぜひ参照ください)

工程

内容

皮を剥く (六月下旬)	しなの木を切り倒して枝を落とし、外皮を剥ぎ、中皮をとり出し最低一週間から十日、日光に当てて乾かした後、屋根裏部屋などにしまっておきます。
しな煮 (八月～九月)	一昼夜水に浸けて巻いた皮を、赤土で作ったかまどに乗った大きな釜に入れ、木灰、水と一緒に十～十二時間ほど煮て、柔らかくします。
しなこき (八月～九月)	釜から出してさつと水洗いした後、幾重にも重なった皮を一枚ずつ層ごとに剥がしていきます。これを川に持って行き、石や竹棒でこいて繊維だけを残し、一枚の柔らかい「しな」を作ります。
しな浸け (八月～九月)	大きな桶 <small>おけ</small> に入れて、こめかど水に一昼夜浸け、川の水できれいに水洗いします。それを「しな裂き」まで、軒先などにつるして乾燥させておきます。
しな裂き (十一月～十二月)	湿り気を与えながら指先でしなを裂いて糸のようになります。
しな績 <small>つ</small> み (十一月～三月)	糸のつなぎ目に穴をあけて糸をつなぎ、よりをかけて長い「しな糸」にします。糸作りの中で最も根気のいる作業です。
へそかき (十二月～三月)	「しなより」を容易にするために、績み終わったしな糸で「へそ玉」を作ります。
しなより (二月～三月)	より車を使って糸にさらによりをかけます。乾燥するとささくれるので、「へそ玉」を充分にぬらして糸よりをし、「より糸」を作ります。
機織り (二月～四月)	できた糸を、本数と長さを合わせて機織機にセットし、丹念に手織りで織り上げていきます。

から一生懸命やったわけ。おばあさんもお母さんもそうだったと思うけども、ちよつとの時間でもしなの糸を紡いでたわけ。私もそれを見るから、小学校のころから友達と集まるにも、しなを持ってやってきました。やっぱり当たり前の遊びの一つでもあり、どこに行くにもしなは持って行くっていう感覚なわけや。

しな織から学ぶもの

石田 美穂さんは、しな織協同組合の職員さんで、毎日のように「しな織」をやっているわけですが、すけれど「しな織」との出会いにはしな織センターに来られてからですが。

美穂 そうです。生まれは隣の新潟県山北町(現・村上市)で嫁いでくるまでは「しな織」のことは、見たことも聞いたこともありませんでした。

最初、「しな織」を見たときは、なんか薫かほみたいたなあって思ってたんですね。で、ある日突然、温もりがある織物にすくくびつくりして、「ああすごい」って思うときがありました。今、やっとなんか楽しくなってきましたが、まだまだです。

お客さんにもすごい感謝して

います。滋賀県とか、関東とかからも多いです。織物が好きだったり、手づくりのものが、自然の素材のものが好きだっという人が多いですね。来る方は「自然に囲まれていい所ですね」と言ってくれます。

生活の変化と誇れる地域作り

石田 武地さんは今年大学を卒業されて、「しな織」と最初にどこで出会って、何に魅力を感じたのか教えてください。

武地 私が「しな織」を知ったのは、大学の授業で山村に「しな織」の文化が残っているというのを習って、ここに来たのがきっかけだったんです。その時、木から自分の衣服ができていたという話を聞いて、私は自然に生かされて暮らしたいと思って、いたから、もしかしたらそういうこともかもしれないと思っただんです。職業にも色んな選択肢があったけど、これから社会で暮らしていくときに一番基本となる考え方って何なのかなって思っただけに、「人間は今まで自然に生かされて暮らしてきた」というのが原点だと思って。そういう考え方をこれから職業を選ぶときも一生自分の中に置いておきたいと思ってここにきました。

石田 ああ、なるほど。人間が自然の中で生かされると。かつて自給自足で自分たちが織物

も織って着てたことを、山村の生活の中で学んでみたいってことなんですか。すごいですね。

石田 関川のしな織り協同組合の取り組みの中で、大勢の人に門戸開放して伝承していく研修制度があるわけですね。関川の人たちの生活が変わっていった中で、こういう制度導入と地域づくりはどういうふうに変遷したんでしょう。

勇喜 現在、関川は二百人ほどの人口ですが、昭和六十年前後に、関川でも戸数の減少とかが心配されたんだよね。そういう中で、村中の人がやっている「しな織」で村おこしをしようという話になったんです。当時は「しな織センター」なんて建ててみだっただけで、どこからお客さんが来るんだ、って、こういう話を村の人がするわけですが、建ててみると全国各地からいっぱい人がきたんです。みんなびつくりしたわけですよ。「しな織を見に来るなんて」と不思議がって。そして、だんだん「しな織」の良さというものを、村の人がお客さんから教えてもらったんです。それまでは当たり前前のこととしてやってきたもの

【写真 しな糸づくりの実演】

手前の方が「しなより」、奥の二人の方が「しな績み」を行っている。より車の前（石の隣）にあるのが、できたより糸を巻いた「つむ玉」。

【写真 しな織までの工程】

幾重の工程を経て、しなはその姿を変えていく。

【写真 しな織り】

昔ながらの「いざり機」という織機を使つての機織の様子。



が、日本中から来て、その価値というものを話してもらつてもんだがら、本当にこれはすごいもんだと言つか、大したもんだなというところを改めて認識したんだな。

そしてしな織センターを建ててまもなく、年間三千人くらい来たんです。当時の村の会長さんが、このままの受け入れ体制ではとても永く続かないと組合を作つたし、専務理事制というものを平成三年から取り入れたんです。そういう中で、今度は平成七年に東京の大学生が、「卒業したらどうしてもしな織をやりたい」と訪ねてきたわけです。来たいと言っても、住む所と食ふことにはある程度のお金もなければいけないわけです。それから、当時の町長さんに相談し、組合と町が研修手当を折半するようなかたちで持ち、受け入れることができたわけです。

石田 私、すごく思い出にあるのが平成七年の「全国古代織サミット」。日本の六大古代布を集めて、お互いの産地の話を集めて、お互いの産地の話を集めて、その問題点を話し合いなから今後の良い施策をしようっていう。また、それぞれの家を開放して「しな織」の工程を見せたいわけですよ。あの時は山が溢れるくらいに人が来ましたよね。

勇喜 本当によい来たんだよな。当時の町長さんが「関川に銀座ができた」という表現で喜んだものです。

それまでの「しな織」というのは、全国の古代織の中で、どちらかと言えば、ランクは下の方だったんです。ところが、サミットの成功によって、一躍ほかの古代布に肩を並べたと私は見てます。そういう意味でも、あの成功というのは非常に有意義であつたと思います。

そして、大学の先生とか、研究機関の方とかがいつばい来て、全国で紹介していただくことで、「しな織」が非常に広まつた。だから、今は本当にほかに負けないと思つてます。

石田 「しな織」が自分たちの誇りを喚起したっていうこともあるんですよ。「自分のふるさと」として、っていうきっかけを作つたと。関川地区が過疎化にならないっていうのは、やっぱり「しな織」と関係あります。勇喜 離村する人が少ないっていうことと「しな織」は、家庭というもののあり方という面、関係があると思うんです。関川のおばあさんたちは「しな織」の現役で、それなりの収入があるんです。家庭の中でも貴重な存在になつてくるんだよな。おば

あちゃんにある程度の力という存在感があると、嫁と姑の仲が非常に上手くいくということ、は確かにあります。

新たな魅力の発信へ

石田 この「しな織」の長所というものを活かしながら、現代の製品にするということで、須田先生に依頼があつたと思つたんです。先生がしな織の帽子とか製品を作るきっかけと、今までやってきたことのお話をしていただけかもしれません。須田 「しな布」に携わつてからこの二十一年間、一日としてしな布を触らないでの生活っていうものがなくて今日あるわけですが、一番初めは立体のものができるとかどうかっていうのをいぶん悩みました。今まで教えられた材料には何の苦労もなく作れたものが、「しな布」は糸は弾ける、織りは粗い、その上にミシンをかければ平らに縫えない。それで、癩癩に堪えかねてその帽子を三つも四つも切り裂きました。で、ある時に、その切り裂いたものをポンと水のある所に落としました。そうしましたら、見る見る間にその布が水をフワッと吸い込んだんです。あれっと思つて、通気

解説

延喜式：律令の施行細則を集めた古代法典。平安初期の禁中の年中儀式や制度などの事を漢文で記している。

六大古代布：京都府の「藤布」、福島県昭和村の「宇麻織」、徳島県木頭村の「太布」、静岡県掛川市の「葛布」、沖縄県国頭郡喜如嘉の「芭蕉布」、温海町関川の「しな織」（自治体名は「全国古代織サミット」開催時のもの）

伝統的工芸品：「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」に基づいて経済産業大臣から指定された工芸品。用途や製造工程、技法、材料、産地などの要件を満たすことが必要とされる。

県内では、羽越しな布のほか、山形錆物、置賜細、山形仏壇、天童将棋駒が指定されている。

また、消費者が伝統的工芸品を安心して購入できるように、経済産業大臣が指定した技術・技法、原材料で製作され、産地検査に合格した製品には、「伝統マーク」をデザインした「伝統証紙」を貼ることができ、



（「伝統証紙」見本）

着尺：和服用の反物で、大人の長着一枚を作るのに必要な幅と長さのもの。

性があつて水をダップリと吸つても乾かしたら元に戻るんだっていう「しな布」の特性を、自分の恥から教えられたんです。

私がちょうど帽子を仕上げるころ、「しな布」を全国に広めるころには、あまりにも化学繊維の色彩っていうものが氾濫（はんらん）して、それに対する自然素材のものをもっと皆さんが求めてくれるようになりました。そのような経過で、とにかく、関川という所で「しな布」っていうものができているのだということ、日本中の方々に知ってもらいたい、その一念だけで今日までできた感じがします。

石田 もう一つ、「しな織」がリンクアップしたのが、経済産業省の「伝統的工芸品」に指定されたことです。全国で二百七番目です。庄内では唯一なんですね。

勇喜 伝統的工芸品の動きっていつのは、新潟県の山北町の方がちょっと早かったんですが、あくまでも共同戦線を張って進めていこうとなつて、平成五年に新潟県で第一回目の集まりがあつたんです。それ以来、何回となく話し合いを繰り返して、ようやく一応の案がまとまつて経済産業省にヒアリング行ったところが、「資料不足だ」と、ま

ずもつともつと充実した資料集めてからまた来てくれ」と言われて。ちょっと頓挫（とんざ）したわけなんです。そうしているときに、サミットで知り合った東北芸術工科大学の山中良子先生（当時）に、その話をしたら、「このしな織が伝統的工芸品に指定されないなんてことはありえない」と言つんだな。「絶対に指定されるものだ」と。その言葉を力に、

今度は、行政も巻き込んで挑戦して、ようやく、平成十六年ころから急激に進行したんです。

ただ、伝統的工芸品には、布は着尺（きやく）として指定されているんですが、「しな織」だけは、百年以上前は衣類や帯としては使われなかつたわけで、非常に苦労したんです。これも、山中先生が「しな織は、工程そのものが工芸品に値するんだ」と、主張してくれ、工程そのものが「しな布」として指定されました。

ただ、布としての指定ですから伝統的工芸品の表示を、須田先生の作っている帽子とかバツクとか、そういうものに使つためには、いわゆる素材認定証紙の認定を受けないと使えなかつたんです。それで、指定を受けてから、ようやくつい最近、その素材伝統証紙を使うことができるようになったんです。

伝統的工芸品の指定によつて、経済産業省から後継者対策というところで補助金が出ますので、自分たちが及ばない面をそれを利用していかなければならぬ継者を育てていかなければならないと思つています。

次世代へつなぐ思い

すね。根本の元となる布がよくなければ、また商品としてこの世に残り、次の世代の人にも使つてもらつたものを生み出していかなければ、「しな布」の存続っていうことはできなくなつてくる。そこを、糸を紡ぐ人も、木を育てる人も、ずっと守ってきたわけですから。先代先々代のご苦労っていうものを忘れないで、そして、「しな布」に命を吹き込んで守っていくことが、今、「しな布」を思う存分使わせていただいている、我々の使命だと思つてます。私も関川の方々に支えられて、長い間帽子を作らせていただいて、幸せだったなつて感謝していますし、胸をはつて石田さんたちが、全国を回つてくださつ

須田 今織っている方々も、毎日しなの糸に問いかけて、その自然の空気を察知して織られる様になつていくはずだし。その次の方々が物づくりするときにも、心を砕いて、自然の良さに逆らわない物づくりを心がけていただきたいというのが私の願いです。そうすれば、本当にこの土地に育ち、代々育つた文化の継承という、大事なその木を守つて、「結」の生活を保持し、そして布を織り上げていくっていう方々には、迷いの生じる時期なんてものはないと思います。

昔の人が申した様に、継続っていうものは、本当に尊い力になるのだから。累々と、勇喜さんたちが守つたものを、今度はその次の若い人たちにも引き継いでいって、大事にしていかなければならないものは絶対に譲らないで、その生活をきちつと受け継いでいってもらいたい

石田 私は、小さいころから工芸品が大好きで、東京での大学時代、駒場にある日本民藝館で、



しな織製品に囲まれた座談会の参加者



「全国古代織サミット」の様子とパンフレット



「しな織を使った製品の数々」いくつもの作業を重ね生み出される作品は、織り目の美しさや生なりの和み色などで、多くの人を魅了しています。

世界の「文化の継承」として

石田 鶴岡市は合併して、「森林文化都市」というスローガ

人間国宝の芹沢銈介さんの展示会で「しな布」を見て、感激しちゃったんです。調べてみたら、我がふるさと温海の関川地区でそういうのが残っている。それを知ったときに、「俺、日本民芸運動のしな織版をやりたい」と思っただけです。

私は、衣料品店の跡取りで、ブティックと呉服屋と二店で修業しましたので、少しは知識はありました。産業として残していくことに関わりたいたいと色々な活動をやってきました。平成二年にしな織創芸の店を開き、全国の人に実際に手で触って見てもらおうと、今まで三十五都道府県を回りました。呉服屋さんブティックの特別展。あとはデパートの工芸職人展などイベントを一年間で二十回から三十回開催しています。私の接客で「しな織」の良さが少しでも伝わるように日々いろいろと勉強してきました。初めて見るお客様は、木の皮が織物になるなんて信じられないとビックリします。しなの木という名前をもっと知ってほしいと思います。

を掲げました。その先進地がドイツのフライブルクで、名誉市民の北村昌美先生とそのフライブルクの大学が学術交流があり、また民間交流もあつたんですよね。私も去年と一昨年、二度一緒に行かせていただきました。ドイツ語でしなの木を「リンデ」と言っていますが、まずあちこちに有ること。街路樹がしなの木だし、広場のシンボルツリーもしなの木なんです。で、凄いことが分つたんです。リンデの属名がラテン語の「テリリア」と言っていますが、織物って言う意味なんだそうです。織物・布地・網。また、しなの木の語源は、アイヌ語の「シニペシ」ということだそうです。が、意味は、織物・ロップ・布なんです。

が、先程の話と同じように余りにも当たり前に使ってたものだから保存されてはいなかったのではと思われまます。そう考えるとしなの木が育つ、冷温帯地域の生活文化の中でしなの織物があつたんだろうと想像されます。すると機械文明以前の織物が、世界で唯一関川地区のみで傳承されているとしたらすごいことだなと一人で興奮していました。全国的に珍しい位にしか思わなかったものが、世界的に凄いものなのですから。

「灯台もと暗し」とはよくあることですが、「しな織」がこれ程大事な織物であることを関川の人々にも、市民の皆様方にも再認識してもらえればと思うのです。

関川地区の皆さんが、木を植えて育てる。新しい時代の「結」の精神で織り継ぐ。しな布の長所を活かしつつ時代のニーズにこたえながら製品化し、商品の後にある関川の暮らしや文化、「しな織」の歴史などの物語を添えながら普及していく。それぞれのポジションを理解しながら三位一体となつてしな織文化を次代に継承していきたいですね。皆さん、今日は、ありがとうございました。

一同 ありがとうございます。